

---

# ペルージャの青い華

星野すばる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルージャの青い華

### 【Zコード】

Z2586

### 【作者名】

星野すばる

### 【あらすじ】

男に生まれたかったアコラ姫、姫に拾われた記憶喪失の青年タリク、2人に振り回されっぱなしの近衛兵ラティン。姫をめぐる三角関係？ いやいや、そつちよりむしろ アラビアンナイト風異

世界王富FT

漆黒の硬そうな髪。

それが、その青年に対するアコラの第一印象だ。この辺りでは、黒髪は珍しい。大体が日に焼けたような茶髪か、アコラのような金髪で……もつとも、アコラの純金の「」とき輝きも珍しいのだが。それはそれとして。

（なんだって、こんなとこに寝てるんだ？）

ここは、王宮の中庭だ。普通に誰もかれもが出入りできる場所じゃない。なのに、この明らかに余所者の青年が寝ている。

「おい、お前」

アコラは頭のすぐ横にしゃがんで声をかけた。しばらく待つても返答はない。

「どうか、起きない。

「おもしろい」

「ややり、とアコラは笑つた。

ペルージャ国の中妹アコラは男に生まれたかったと豪語している。黙つて立つていれば、この世に立つとない金髪と鮮やかな青い瞳の美少女。「ペルージャの青い華」と、王宮の面々だけでなく、国民からも誇りしく呼ばれている。それが、何の因果か剣を振り回すのが大好きで、片時もじつとしている。

今日も朝からお付の兵士ラディンの、姫を捜す声が王宮に木霊する。

「呼んでるぞ」

タリクが植え込みに向かつて呼びかけると、その茂みから、ペラゴンと金色の巻き毛が現れた。

「もうばれたか。なら、急がないとな」

アコラが笑う。

「あとは任せたぞ、タリク」

「面倒なことは、すぐ人に押し付ける

「当然だ」

じゃあな、とアコラは元気よく手を振り、走り去つていいく。その後ろ姿を見送りながら、タリクは「さて」と、己の黒い頭を搔いた。まもなく、声の主が姿を現した。

「タリク！ お前がここにいるところじま、姫も近くにいらっしゃるか？」

男にしておくにはもつたない優美な顔を瞬時に歪め、ラディンが詰め寄る。

「アコラなら」

「アコラ『姫』！ 呼び捨てにするな！」

何度も言つたら分かるんだ、とラディンがタリクに指を突きつけ、咆える。タリクは少し下にあるその青い目を見つめ、鼻を鳴らした。

「あいにく、俺はアコラの家来じやない

「客人だとでも？」

「そこまであつかましくはない」

「よく分かつてゐるじゃないか」

では、と言つてラティンがタリクの脇を通り抜けようとしたそのとき。

「わーっ！」

足を引っ掛けられて、前のめりに転倒する。

「おつと」

タリクが片腕を伸ばしてその体を受け止める。そして、言ひ出

「お前の顔に傷をつけたら、アコラがうるさ」

「だつたら、足など引っ掛けるな！」

「よける、じれぐら」

仮にも訓練を受けた近衛兵、そのくらいの反射神経はあるはずだ。タリクが片方の口角を上げて言ひ。ラティンの顔が見る間に赤く染まつた。

「ゆ……油断しただけだ！」

「戦場でそれは、命取りだぞ？」

「ほお、知つたふうな口だな。記憶が戻つたのか？」

それはめでたいと、ラティンが眉を吊り上げてタリクをにらむ。その瞬間、タリクが表情を消した。

「いや……」

視線も反らす。

「そういうわけでもなさそうだ」

他人事のようにタリクがつぶやいたそのとき、ラティンが身をひねるようにして拳を突きつけた。

顔面に当たる寸前、タリクは片手でそれを受け止めた。

互いの拳ごしに視線を合わす。互いの目を見据え、そこにあるはずの真実を探る。

「それだけの身のこなし。お前は絶対素人じゃない」

ラティンがそう言えば、タリクも「ああ」とつねずく。

「俺も、そう思つ」

「ふざけるな！」

「だったら、いいんだがな。お前がどう思おつと勝手だが、本当に覚えてないんだからしかない」

「あいかわらず、何も思い出せないのか？」

「ああ」

タリクはラティンの拳を押し戻すようにして放した。ラティンもそのまま拳を納め、視線を外す。ポツリとつぶやいた。

「悪かつたな」

タリクは1ヶ月ほど前、王宮の中庭に倒れていたところをアコラに助けられた。1昼夜眠り続けて目を覚ましたとき、自分が何者で、どこから来たのか、何一つ覚えていなかつた。「タリク」という名前と、おそらくは東のほうから来たことだけ、その数時間後にからうじて思い出した。

ラティンがおとなしくなつたのを見て、タリクがまた片方の口角を上げた。

「しおらしいな。気持ちが悪いぞ」

ラティンが反射的に顔を向ける。その瞬間をつまくねらつて、タリクは彼の顎を捕らえた。

「実は俺に惚れるとか？」

「な……っ」

怒りでラティンの顔が真っ赤になる。

だが

「まああつ！ ラティン様とタリク様が見詰め合つてこらつしゃるわ！」

「タリク様ー、そのまま押し倒しちゃつてくださいませーーー！」  
女官たちの妙な声援が飛んできて、2人は我に返つた。

「バ……バカ、違う！」

ラティンがタリクの手を振りほどき、叫ぶ。タリクはそのまま無

表情に、彼らのやりとりを眺めている。

「お前、アコラを捜してたんじやなかつたか？」

「そつだつた！」

タリクに指摘され、ラティンが我に返つた。

「今日こそは逃がさないつもりだつたのに！ 姫一つ！」

ラティンはそのまま騒々しく駆け去つた。今度はタリクも邪魔し

なかつた。

王宮近くの市場にアコラが姿を見せるとい、皆一斉に気付いて笑顔になつた。

「姫様、おはよひござります」

「おはよひ」

アコラも笑顔で挨拶を返す。子供たちが飛び出してきて、アコラを取り巻いた。

「姫さま、ねえねえ、踊つて」

「踊つて！」

手を取り、期待に瞳を輝かせる。そんなふつに頬まわしては、アコラもイヤとは言えない。

「でも、今日は相手がいないからなあ」

「1人じゃ踊れない？」

「いや、踊れるが、あれは相手がいたほうが映える踊りだから」

「だったら、ラティン様を置いてきちゃ いけませんな」

近くの店の親父が訳知り顔で笑う。アコラが口をとがらせた。

「あいつがついてくると、何かどうるさい」

「しかたありませんやな。ラティン様は姫のお守役なんですし」

「守役？ 確かに、口うるさいところは乳母にそつくりだ」

そう言つて、アコラは明るい笑い声を響かせた。周りの者もつりれて笑つた。

「じゃあ、軽く体動かすか」

アコラは腕を高く上げて体を伸ばすと、辺りを見回した。手頃な棒が視界に入ると、手に取り、重さを確かめる。

「よし。皆、ちょっと離れてろ」

「わーい！」

子供たちが周囲に散る。アコラは棒を構えると、呼吸を整えた。どこからともなく太鼓が鳴る。いや、周囲の店の親父や客が適當

な器や手を叩き、拍子を取つてゐるのだ。

ペルージャの民は元々歌舞音曲に優れている。言葉を覚えるのと同じように、ごく自然に歌を覚え、楽器を弾き、踊る。酒場でも市場でも、ペルージャの民が複数集まれば必ずそこに音が生まれ、踊りが始まると言われている。

老いも若きも、性別、身分の上下も、そこにはない。音の鳴り響く間、すべての者が等しくその楽しみを分かち合つ。

アユラが拍子に合わせて踊りだした。

突き、払い、ふりかぶつて薙ぎ払う。あるいは頭上高く掲げて、体を一回転。小脇に抱えて片足立ちしたかと思うと、力強く足を踏み鳴らして棒を突き出す。

剣、あるいは槍で舞われるそれは、本来男が2人1組で踊るものだ。1人では、よほど所作の身についた者でなければ迫力に欠ける。だが、アユラが舞うなら、そんなことは問題にならない。技術はともかく、堂々とした舞姿は駆け出しの踊り子などよりよほど勇ましく、美しい。

なにより、見る者を楽しくさせる。アユラが舞えば、いつのまにか周囲に笑顔の人だかりができている。

今もまた……。

「みーつーけーたー」

「うわっ！」

人垣を押し分けて前に出てきた青年 ラティンに気付くと、アユラは瞬時に固まつた。

「ひーめーさーまー」

ラティンが怒りの気をまき散らしながらにじり寄る。

「き……今日は早かつたな」

アユラが苦笑いしながら後ずさる。

「ええもう、これだけの人だかりができていれば、一発です」

ラティンが一変してこれ以上ないほどにこやかに笑う。その豹変ぶりもまた恐ろしい。

「そ、そうか……それもそうだな。うん」  
アコラがさらに後ずさる。そのとき、1人の子供が飛び出してラ  
ディンの足にしがみついた。

「うわっ」

「いまだ！」

他の子供たちもワツと飛び出し、ラディンを押さえにかかる。

「姫さま、いまだよ、にげて！」

「え？ いや、それは……」

「姫さま、にげて！」

子供たちに悪気はない。だから、ラディンも怒るに怒れない。まさか蹴散らすわけにもいかず、完全に動きを封じられてしまった。

アコラがク、と喉を鳴らした。

「アツハハハハハ」

そのまま、しゃがみこんで爆笑する。辺りからも笑う声がもれだした。

「姫、笑い事じゃないです！」

ラディンが口をとがらせる。

「だつて、お前……それ、おもしろすぎ」

腹を抱えて、目に涙まで浮かべている。ラディンの肩がプルプルと震えだす。

「ひーめーをーまー」

「う……あー、皆、気持ちはとても嬉しい」

ラディンの声音が変わったので、アコラは潮時と察した。

「だけど、ラディンはべつに私を怒りにきたわけじゃない。だから、

放してやつてくれ」

「ラディンさま、本当に姫さまのこと怒らない」「知らない？」

1人が彼の顔を見上げ、尋ねる。ラディンはその子供を見ると、柔らかにほほ笑んだ。

「怒らない。約束しよっ」

「姫さまと一緒に踊ってくれる？」「

「 は？」

「 わー、踊つて！」

「 ラディンさま、踊つて！」

「 え、ちょっと……姫、なんでこうなるんですか？」

「 さあ？」

アユラにも分からぬ。肩をすくめ、苦笑してみせる。そういううちに、子供たちは期待を込めてラディンを見つめる。その視線に、ラディンも負けた。

「 では、相方を務めさせていただきます」

「 うん」

誰かが投げてよこした棒を受け取り、ラディンはアユラに相対した。アユラも応じるように構えをとる。

また、自然と拍子が入る。呼吸を合わせて、2人は舞い始めた。受け流す、突けば払つて切り返す。ラディンの所作はアユラのそれより洗練されていて、1つ1つに無駄がない。アユラよりもよほどこなれている。元々剣を扱い慣れているからだろう。

なにより、2人の呼吸が本当にピタリと合っている。棒とはいえ、気を抜けば大怪我につながる。だからといって、どちらかが遠慮しているようなそぶりはない。2人とも本気で打ち合つてている。それだけ、お互いを信頼しているということだろう。

だからこそ美しい。人の目を惹き付け、心を捕らえて放さない。

「 はつ！」

アユラが最後に一際力強く振り下ろした棒を、ラディンがピタリと止める。そこで、舞が終わつた。

周囲から、ワツ、と歓声が上がる。それを、2人は誇らしく笑つて受け止める。

「 姫さま、かっこいい！」

「 すごーい！」

「 姫さまー！」

子供たちがアユラに群がる。アユラはその1人1人の頭を順に撫

でてやる。その様子を見て、ラティンは苦笑交じりのため息をついた。

「姫、満足されましたか？」

頃合で声をかける。アコラが顔を振り向け、笑った。

「ああ。今日も皆の笑顔を見れて、とても嬉しい」

アコラがそう言つと、周りの民が嬉しそうに笑う。いちいち、と誰かが言えば、周りの者もつられて「姫様、ありがとうございます」と手を振る。

アコラも手を振り返した。

「では、そろそろ帰りましょう」

「うん！」

ラティンの言葉に、アコラは素直につなづいた。

アコラとラティンが王宮に戻ってきたとき、タリクはまだそこにはいた。

「また、寝てる」

アコラが苦笑する。

「落ち着くんじゃないですか。大体、あそこが定位置ですから倒れてた場所だからかな」

「そうなんですか?」

「うん」

中庭……正確にいうなら、王の居間と女たちの住まう後宮とを別つ庭園だ。後宮側でなかつたのが救いだらう。そうでなければ、さすがにアコラもかばい切れなかつた。

「タリク」

アコラは最初に見つけたときと同じように頭のすぐそばにしゃがみ、声をかけた。しばらくして、タリクが目を開く。アコラの顔を見て、ほんの少し口角を上げた。

「おかいり、アコラ」

「ただいま」

「だから、呼び捨てにするなと言つのに!」

ラティンが呟えたが、アコラとタリクはきつちり無視。

「いつもここに寝てるな。どうしてだ?」

「何か思い出せるかと思つてな」

「思い出せそうか?」

タリクはその質問に肩をすくめることで答えた。

「焦らなくていいぞ。ラティンはつるさいが、私はお前がいたほうが楽しい。本当に、ずっとここに居ていいいんだからな」

「そんなことばかり言つてると、ラティンが憤死するぞ」

タリクがチラッと彼を見て、片方の口角を上げる。

「ホラ、ここにいる

「んー？」

アユラが振り返る。確かに、ラディンの表情はこの上なく険悪だ。  
「ラディン、せっかくの美人が台無しだぞ」「そう思つなら、こんな顔しなくていいように振舞つていただけますか、姫？」

「イヤ」

アユラがニッコリ笑う。タリクが爆笑し、ラディンはガックリと肩を落とした。

そのとき、後宮の側から女官が一人飛び出してきた。ラディンがすぐに駆け寄り、その腕を掴んで止める。

「ここより先は王の居間だ。立ち入りならん」

「あ……」

女官は我に返つてラディンを見ると、ほんのりと頬を染めた。

「申し訳ありません」

「早く持ち場へ戻りなさい」

「はい……でも、あの」

女官が田を潤ませてラディンを見つめる。ラディンはイヤな予感を覚えた。

その瞬間

「お助けください、ラディン様！」

女官はワッと鳴き声を上げてラディンの懷に飛び込んだ。やはり、こうきた……ラディンが固まる。

「私、大変なことをしてしまつたんです。でも、私が悪いんじゃないんです。なのに誰も話を聞いてくれなくて……」

「そんなこと、急に言われても……」

ラディンが彼女を持て余してオロオロする。そのとき、アユラが2人の間に割つて入り、女官をベリツと引き剥がした。

「ひ……姫様っ」

女官があわてて後ろへ下がる。ラディンがホツと一息ついた。

「義姉上のところのシャイアだな。何があつた？」

アユラはこめかみに青筋を立てて、ニッコリと笑っている。

「あの、私……王妃様の大事な櫛を……」

「兄上が贈られた、螺鈿細工のアレか？」

「それです、その櫛です！」

「それをどうしたつて？」

「失くしてしまったんですねーっ！」

シャイアはワッと泣き声を上げてアユラの横をすり抜け、またラディンにしがみついた。瞬時に、アユラが引き剥がす。

「失くしたものは仕方ないな。義姉上に正直に話して謝るといい」

声に、棘が増す。

「それができれば、こんなふうに泣いてません！」

「泣いて櫛が出てくるんなら、私も一緒に泣いてやる。さあ、どうする？」

「姫、ちょっとお言葉がきついのでは」

「なら、お前が相手してやるんだな」

「わー、行かないでください！」

アユラが去りかけたので、ラディンはあわててその衣を掴んだ。

「…………？」

木陰に移動し、そこに腰を下ろすと、本腰入れてシャイアの話に耳を傾ける。

「今朝、王妃様がお使いになつたあと、私、確かに棚へ戻したのです。ところが、先ほど王妃様が棚を開けられると、櫛がなくなつていって……」

「それで、お前がどうかしたと疑われてるのか？」

シャイアが「クリとうなずいた。アユラが軽く息をつく。

「それだけで簡単に人を疑うような方ではないんだが」

何があるな、とアユラが同意を求める。ラディンとタリクが即座にうなずいた。

「お前、本当に何も知らないんだな？」

「私ではありません！」

「となると……」

「現場を見たほうがいいな」

タリクが提案する。アコラが指を鳴らした。

「私も今それを言おうと思つたんだ」

「それなら、早いほうがいいですね。もし、犯人が中にいるなら、今ごろ証拠隠滅を諂つているかもしません」

「そうそう。お前も中々いいこと言うな、ラディン」

アコラがニッコリと笑う。なぜかその瞬間、悪寒を覚えたラディンとタリクであった。

「義姉上、入ります」

アコラが声をかける。すぐに中から応じる声があった。

「ごきげんよう、アコラ」

義理の姉、つまり、国王たる兄の妻カリカ・ラキアが機嫌よく出迎えてくれる。

彼女は飛び抜けて美人ではないが、どこか人を和ませる笑顔の持ち主だ。王もそこが気に入つたのだろうと、民の間では噂されている。だが、それだけではないことをアコラは知っている。

「あら」

カリカ・ラキアがプツと小さく吹き出す。

「ラディンと、もう1人は誰？」

アコラの後ろに、目だけ出して頭からすっぽりと布をかぶつた、やたらと背の高い女官が2人いる。

「さすが義姉上。よく、これが奴だと分かりましたね」

「そんなに大きな女官はいないもの」

あつさり見破られたラディンがガックリと肩を落とす。

「だから、無理だと申し上げたんです」

「そうは言うが、後宮は男子禁制なんだぞ。お前たちが潜り込むには、そうするしかないじゃないか」

「潜り込みたくなんかなかつたです！」

「カリカリするな。せつかくの美人が台無しだぞ」

「そうよ、ラディン。せつかく来てくれたのだから、久しぶりにあなたの顔が見たいわ。それ、外して」

鬱陶しいし、とカリカ・ラキアがやんわり命じる。ラディンがすみやかに従い、タリクが続いた。

「あいかわらずきれいね、ラディン」

「ありがとうございます」

ラティンが、あまり嬉しくなさそうに頭を下げる。いいかげん聞き飽きているし、男としてそれほど名誉な贅辞でもない。

おまけに、言つほうも、実はその辺りの反応を面白がってわざと言つていたりする。アコラとタリクが笑いをかみ殺しているのがよい証拠だ。

カリカ・ラキアがタリクに目を留めた。

「見ない顔ね。新しい従者?」

「1月前に拾つたタリクですよ」

「ああ、その人が。噂は聞いているわ」

「へえ」

「どんな噂だか」

ラティンがポツリと言つ。

「勿論、あなたとの関係」

カリカ・ラキアがニツコリ笑う。ラティンがむせる。

「もうね、皆つるさいのよ。あなたたちがどうしたこうしたってアコラに真相を聞いてほしいと、頼まれることもある。カリカ・ラキアがわざとらしくため息をつき、チラシとラティンを見る。ラティンが復活した。

「前から不思議なんですが、どうしてそういう根も葉もない話が飛び交つてるんですか?」

「根も葉もないの?」

カリカ・ラキアがアコラを見る。アコラはタリクを見る。タリクはラティンを見、ボソッと告げた。

「お前が俺に妙に突つかかるからじゃないか?」

「それだけで?」

「女というのは、時々妙なことを考へるからな

「あなた、よく分かつてゐるのね」

おもしろい人、とカリカ・ラキアが口許に手をあて、笑う。タリクを氣に入つたようだ。

「それで、そんな格好させてまで、どうして2人を連れてきたの?」

「それなんですか、義姉上、櫛を失くされたと聞きました」

「櫛……ああ、そうなのよ、今朝使つたあと、ちゃんとしましたはずなんだけど。で、どうして、あなたが知つてるの？」

「シャイアが大騒ぎしてたので」

「あの子ねえ……悪い子じやないんだけど、ちょっと大げさなところがあるから」

「でしょうね」

アユラがうなずく。ラティンとタリクも同意を示す。

「それで、私で何かお役に立てないかと思つて、こつして知恵袋連れてお訪ねしたわけです」

「ありがたいこと」

「櫛はどこにしまわされてたんですか？」

「その棚よ」

カリカ・ラキアが指し示す棚に、アユラが近づく。

「1番上の引き出し」

「義姉上が直接出し入れされたんですか？」

「ええ。大事な櫛ですもの。誰にも任せられないわ」

「そのとき、シャイアはそばに？」

「ええ。髪をといてもらつたの。そのあと、私自ら引き出しに戻しましたのだけど、シャイアはその間ずっと見ていたわね」

「ちなみに、義姉上はこの部屋から出られましたか？」

「朝餉のあと、少し散歩に出たわ。なくなつたとしたら、そのときね」

「1人で？」

「そうよ」

「シャイアは？」

「部屋の前で見張り」

「じゃあ、やつぱりシャイアが疑わしいか」

アユラは引き出しに視線を戻した。

鏡と小箱が1つあるだけだ。何度見ても、そこに櫛はない。

「ラティン、タリク、どう思つ?」

「もう一回、シャイアに話を聞いたほうが早いんじゃないですか?」  
ラティンが肩をすくめてため息をつく。タリクはアコラの隣に立つと、中をのぞきこんだ。

「これ、何の毛だ?」

そして、黒い毛を摘み上げる。短くて硬い。アコラが首をかしげた。

「こんなに黒いのなんて、お前の髪ぐらいだな」

「タリクつ、お前、まさかここに忍び込んだのか? 見損なつたぞ!」

「ラティンが砲える。タリクが半眼になつた。」

「『見損なつ』ということは、好意をもつていたのが前提だぞ。お前、実は俺のこと好きだったのか?」

「な……つ」

「キヤー、やつぱりそうだつたんですねー!」

その瞬間、入り口を蹴破る勢いで女官たちが多数なだれ込んできた。

「皆、聞いたわね!?」

「ええ、しつかり!」

「ああ、まだ夢を見てこるよつですわあ」

「夢ではありますことよ! 皆で聞いたんだですから!」

「早く、このことをナリに報告して! 物語にしてもいいのよ!」

「そうですね、そうですねわ」

「皆様、早く行きましょー!」

「はい!」

そして、また一斉に出て行つた。

「なんだつたんだ……?」

「皆、退屈なのよ。刺激を求めていつも皿を光らせ、聞き耳を立ててこらの」

「と、こいつとは

「

「お前と俺、公認になつたつてことだな」

「なんでそうなるつ！？」

「ちなみに、ナリというのは後宮の記録係でね。趣味で物語も書いていて、女官たちの格好の娛樂になつていてるの。明日には、あなたたちの物語が出回つているわね」

カリカ・ラキアがニッコリ笑う。ラティンが撃沈した。

「本当に、からかい甲斐のあるやつ」

タリクがクツと喉を鳴らす。

「まったくだ。見てて飽きない」

アコラも笑う。

「本当に可愛いわあ。ねえ、アコラ、この子、このまま置いていつてくれないかしら？」

「は？」

「十分女官で通用するわ。きっと毎日が楽しくてよ」

「そんなに退屈ですか？」

「刺激がなさすぎるのよ」

カリカ・ラキアがため息をつく。それから、ふと思いついた。

「となると、ラティン田当ての女官が増えるわね。その分費用もかかるから……大変。後宮費倍増で国庫が赤字になるわ！」

ババッ、と数字を弾き出したカリカ・ラキアは、アコラに向き直つてその手を握った。

「残念だけど、あきらめるわ。この子、早く連れて行つて」

「義姉上……」

アコラがガツクリと肩を落とした。

カリカ・ラキアはこの国1の商家の娘だ。そのため金勘定が得意で、管理もしつかりしている。だからといってケチなわけでも、逆に浪費家というわけでもない。良い使い方を心得ているということだ。

そして、その点こそが兄に気に入られた美德であることを、アコラは他でもない、兄自身の口から聞いて知つてはいた。

王宮の庭は大抵手入れが行き届いているのだが、まれに雑草生え放題な場所もある。まさにその場所で、少女が一人、草引きの真つ最中だ。

まだそれほど日は高くないが、そろそろ暑さの厳しくなる時間。大の男でも嫌がる労働に、その少女は歌など歌いながら勤しんでいる。

「へえ、いい声ですね」

ラディンがまず気づいた。

「うん」

アコラも田を見張る。

高く澄んだ明るい声がうだるような暑さを和らげ、そこだけ涼しい風を運んでいる。

「これは思いがけず掘り出し物かもしれないぞ」

彼女を探していたのは別の用があつたからだが、それよりもこっちが大事になつてきた。

「ラーシャ」

アコラが名を呼ぶと、少女はビクッと頭を上げた。

「す、すいません！　あたし、さぼってたわけじゃなくて……！」

「見たら分かるよ。安心しろ。私は見咎めたわけじゃないから」

アコラがそう言つてやると、ラーシャがホッと胸を撫で下ろした。やや赤みの強い長い髪をお下げにした、まだ幼さの残る顔立ちだ。自分より少し下ぐらいだな、とアコラが推し量る。

そのとき、ラーシャがやけに田を細めてこちらをジックと見つめていることに気づく。

「どうした？　なにか気に障ることでも言つたか？」

「あ、こえ、そりじゃなくて……あたし、ちょっと田が見えにくくて。上り下りするといつぱり田にするといつぱり田になるから」

「やうなのが。それは不便だな」

「そりなんですよ。だからよく物を壊しちゃつたりするんで、まともな仕事もいえなくて」

「それで、草引きか？」

「はい！」

元気一杯、ニッコリ笑つて答える。特別、そのことを恥じてるわけでもなさうだ。

「ところで、あのー」

「ん？」

「誰ですか？」

どうやら本気で尋ねているらしく。さすがにアコラも虚を突かれてポカーンとなる。

真っ先に反応したのはラティンだ。

「この無礼者ー！」

「えー？」

大声に驚いて、ラーシャが固まる。

「こちらは国王陛下の妹君、アコラ姫なるぞー。この王宮に仕えていながらお顔もご存知ないとば、無礼にも程があるー。」

「姫様あー！」

慌ててラーシャがその場にひざまづく。

「すいません、すいません！ あたし、まだ王宮に上がつたばかりなんで、まだあなたの顔もちゃんと覚えてないんです。本当にすいません」

「言葉使いもなつてないな。お前、出身は？」

ラティンが容赦なく問う。ラーシャがますます縮こまる。そのときアコラが大きなため息をついた。

「ラティン、そんなことはビリでもいい」

「どうでもよくありませんー！」

「タリク

「ん？」

「口ふきこでおけ」

「ひつか？」

タリクはすばやくラティンの顎をつかみ、自分の方を向かせる。そして、口の顔（正確には齧）を近づけ

「うわーつ！」

ラティンは彼を突き飛ばすと、一目散にその場から逃げ去った。

「でかした」

アコラがニシコリ笑う。タリクも片方の口角を吊り上げた。

「さて、本題に入らせてもらひ」

アコラがラーシャに向き直る。ラーシャがまた強張った。

「そう固くなるな。ラティンの言つたことなんか気にしなくていいはあ……」

「まずは立て。そんなとこに座つてたら痛いだらひつへ。」

「いいんですか？」

「いいよ。私はそういう過剰な礼儀は嫌いなんだ」

「よかつたー！ もつさつきから膝が痛くてしうがなかつたんですよ。助かります」

素直な少女だ。

「それで、お話つてなんですか？」

「君が猫を飼つてると聞いたんで、ちょっと確認させてほしこ」とがある」

「飼つてるつて言つか、餌あげてるだけつて感じんですけど」

「どつちでもいいよ。真つ黒なんだろ？」

「はい。そこの人みたいに艶々のきれいな黒毛です」

「その猫が、今朝、何か持つて来なかつたか？」

「櫛のことですか？」

「そう、それ！」

アコラはおもわづ指を鳴らした。察しの早い少女で助かつた。

「螺鈿細工の見事な品だから、きっと上の物だと思ってたんですけど、姫様のだつたんですか？」

「いや、義姉上のだ」

「あららら」

ラーシャが苦笑いする。

「というわけなんで、返してもらえるか？ あれは兄上が贈られたものだから、義姉上も困つておられる」

「勿論です！ すぐに取つてきます」

「あ、私も一緒に行く

「え？」

「せつかくだから、その猫を見たい」

「じゃあ、一緒に連れてきますから、待つてください」

「分かつた」

タリクもいることだし、確かにその方がいい。アコラが承諾する

と、ラーシャは嬉しそうに笑つた。

「お待たせしました」

ほどなく、件の櫛と漆黒の猫を抱いてラーシャが戻つてきた。

「うん、この櫛だ。良かつた、すぐに見つかって」

アコラが品物を確認して安堵の息をつく。ラーシャも胸を撫で下

ろした。

「わたしも、大騒ぎになるまえで良かつたです」

誰かに言つて、もし猫を処分しろと言われては困る。さらに言つなら、自分が盗みを働いたようにも言われかねない。それでどうしたものか考えている最中だつた。

「でも、どうしてこの子つて分かつたんですか？」

「そばに黒い毛が落ちててな。猫か犬だらつてことになつて、女官たちに聞き込みしたんだ」

猫は珍しくないが、黒いのは1匹しかいない。すぐに、ラーシャの猫に行き着いた。

「皆、本当に綺麗な黒猫だと誉めてたぞ。確かに、ため息をつくほど美しいな」

夜の闇を塗り込めたような漆黒の、艶やかな毛並み。じつとこちらを見つめる瞳は琥珀のきらめき。一度見たら忘れられない。実に印象的な美しさだ。

「ありがとうございます」

ラーシャが嬉しそうに笑つた。

「一緒に王宮へ来たのか？」

「いえいえ。でも、ここへ来てすぐぐらいに、庭で行き倒れたの見つけたんです」

「庭で……」

アユラはおもわずタリクを見た。その視線の意味に気づいて、タリクが苦笑する。

「どうかしました？」

「ん？ ああ、このタリクも庭で行き倒れたんでな。おもしろい符合だ」

「黒髪ですしね。目の色も同じなら、もつとおもしろかったのに」「まったくだ」

2人が笑つても、タリクは気にしない。

「さて、先に櫛を返しに行つてくる。それが終わつたら、ラーシャ、一緒に昼ご飯食べよう」

「え？ わたしが姫様とですか？」

「うん。もう少し話したい」

「で、でも、そんな……ダメです！ 叱られます！」

「私の誘いだから大丈夫。皆、私の撃破りなのは承知だからな

「本用にいいんですか？」

「いいよ。後で迎えに行くから、部屋で待つて

「はい！」

固辞しないのがいい。この少女もだいぶ頭が柔らかいのだろう。

そして、少女たちは一旦別れた。

昼食の場所はアコラの部屋に近い庭の木陰。敷物を広げて思い思いに座る。

籠一杯のパンをひよこ豆やヨーグルトのデイツプで食べる。カバブ（羊肉の串焼き）は香草をたっぷりまぶしてあり、食欲をそそられるし、石榴水も今の季節しか味わえない。

「おいしいですー！」

ラーシャがいちいち感想をはさみながら食べる。その勢いは中々豪快で、見ていて気持ちがいい。ここへ来るまでは遠慮気味だったのに。

アコラがクスッと笑った。

「全部食べていいよ。足りないなら、持つてこむわし！」

「これだけあつたら十分です！」

ラーシャが首を振った。

デザートはたっぷりと蜂蜜をかけたパイだ。熱いチャイと共に少しずつかじる。

「歌は好き？」

アコラがふいに尋ねた。ラーシャが指についた蜂蜜を舐めながら、皿をしばたく。

「さつき、草引きしながら歌つてたから

「わあ、聞かれてたんですか！」

「いい声だつたぞ。ちゃんと聞きたいな」

「あ、それで、お昼に招待してくださつたんですか？」

「ああ」

本当に察しのいい少女だ。

「いやじゃなければ、歌つて？」

「喜んで」

ラーシャはチャイで喉を潤らせると、得意の1曲を歌い始めた。

少女らしい高めの明るい声が紡ぐのは、この辺りに古くから伝わる子守歌だ。民の間ではよく歌われている。アコラも市に降りたときに何度も聞いた。

アコラは母の顔を覚えていない。幼い内に死に別れた。子守歌の記憶もあいまいだ。乳母は歌が得意ではなかったらしく、あまり歌つてくれなかつたので。

「気に入つてもらいましたか？」

歌い終えてラーシャがニッコリ笑う。アコラも笑い返した。

「うん。歌もいいけど、ラーシャの声は本当にいいな。女官ではなく、歌舞団に入れれば良かつたのに」

「わたしもそうしたかつたんですけど」

ラーシャがため息をつく。

「歌い手は定員一杯で、これ以上いらないつて言われてしまつた」

「誰に？」

「団長です」

「ふーん」

「でも、それだと行き場がなくなるから困つて言つたら、女官の部屋に放り込まれました」

「行き場がない？」

アコラが首を傾げる。

「お母さんが旅商人の後妻になるんです。でも、わたし、この国から離れたくない。お母さんの知り合いが歌舞団にいたんで口きいてもらつたんですけど……」

結果がこれ。

「兄弟はないの？ 他に身を寄せられる親族は？」

「いたら、ここにいません」

「それもそうだな」

ということは、ラーシャとその母親はもともとこの国の民ではないのだ。だから、母親は旅商人について国を出ていけるのだろう。

「だつたら、私の侍女にならないか？」

「え？」

「歌舞団はいらなくとも、私は欲しい。ラーシャも声も氣に入った。だから、私の侍女になつて、もつと歌を聞かせて。先生もつけてやる。どう？」

「すつごこつれしいんですけど、わたし、田のことがあるんで侍女としてはあんまり役に立たないかもですよ？」

「そんなのは他の侍女に任せみじ。ラーシャは私の相手してくれてたらしい」

いやか、とアコラにジッと見つめられて、ラーシャがポツと頬を染めた。

「い、いやなわけないです！ わたしでお役に立てるなら喜んで！」

「じゃ、部屋に戻つて荷物まとめておいで。女面長には私から言つ」

「はい！」

「猫も忘れないで」

「カラもいいんですか？」

「うん」

「ありがとうございます！」

ラーシャはぺこりと頭を下げ、早速部屋に戻つていった。

「姫……」

ラティンがフウとため息をつく。

「説教なら聞かないぞ」

アコラがそっぽを向く。

「説教されるかもしけないことをした自覚はお有りなんですね？」

「どうか、お前ならするだらうと思つて」

「他の者でもします！」

ラティンが大声を上げたので、アコラは反射的に耳をふさいだ。

「そんなに叱るほどのことでもないだろ?」  
タリクが間に入る。

「アコラも年の近い友達が欲しかつただけなんだろ?」  
「そう! そのとおり。さすがタリクだ。よく分かつたな」  
アコラが笑顔でタリクに飛び付く。タリクはその頭をよしよしと撫でた。

ラティンがムツと口をとがらせる。

「余計な口をはさみ、申し訳ございません!」

強い口調で言い捨てる。ラティンはその場を立ち去つた。

「まずい。本氣で怒らせたかも」

珍しくアコラが神妙な顔になる。タリクが柔らかく笑つた。

「そう思うなら、あまりあいつを挑発するな」

「そつはいうが、売り言葉に買い言葉だ」

あいつの言い方も悪い。アコラが愚痴る。

「とりあえず、謝つてこい」

「そうする」

アコラは素直にそう言つと、ラティンの後を追つた。

「本当に、素直な良い姫だ」

見送つてから、タリクは片方の口角を上げ、薄く笑つた。

「ラティン、『めん。言い過ぎた』

彼に追いつくと、アコラは素直に頭を下げた。ラティンが虚を突かれて一瞬ポカーンとなる。それから我に返つてアワアワと周りを見渡した。

「姫! 私などに頭を下げてはなりません。誰かに見られたらいかがなさいます!」

「でも、私が悪かったんだから、謝るのは当然だ。お前は本当に私のことを分かつてくれるから、つい甘えて言い過ぎてしまう。本

「…………」

アコラは譲らず、頭も上げない。ラティンはフウとため息をついた。

「あなたの、その屈託のなこまつすぐなこには好きですよ」  
ラティンがそう告げると、アコラがパツと頭を上げた。その期待に輝く顔を見ては、誰が文句など言えるだろう。

ラティンはさつきまでの怒りも忘れ、心からの笑みを浮かべた。  
「アコラ様、私はあなたの従者であることを誇りに思つております。あなたに仕える喜びに勝るものはないぞこません。これからもあなたに忠誠を尽くします」

「ありがとう、ラティン。私もお前がいい。他の誰かなんて考えたくない」

「もつたひないお言葉、ありがとうござります」  
ラティンはその場に膝をつくと、頭を下げた。

翌朝。

「姫様つ！」

ラティンのアコラを捜す声が王宮にこだまする。

「また逃げられたのか？」

タリクがため息をつく。ラティンは彼に詰め寄ると、その背後をのぞいた。

「なんだ？」

「後ろに隠れてるかと思つたんだが」

「そんな単純バカは」

「バカとはなんだ、バカとは！ 我が主をバカにするのは許さん！」

そう言つて、剣を抜こうとする。タリクは肩で大きくため息をついた。

「だから単純バカと言つんだ」

「何？」

「ほら、また後ろで女官どもが見てるぞ」

「わつ、いつのまに！」「ら、見世物じやないぞ。散れ！」

振り返ればまさにそのとおり。ラティンは顔を真っ赤にして、女官たちを追い払いにかかる。

その姿を、タリクは生ぬるい笑顔で見守っていた。

ペルージャの王宮は今日も平和である。

【第1話 完】

ある朝の食卓でのこと。

「はい、姫さま。あーん」

「あーん」

「おいしいですか?」

「うん、おいしい」

「よかつたあ」

ラーシャがうれしそうに笑う。アコラもにっこりと笑い返した。

「あきれた」

ため息をついたのはカリカ・ラキアだ。

「男に生まれてたら、とんでもなく女泣かせな王様になつてゐるわ、あなた」

「どうしてですか?」

アコラが不思議そうに首をかしげる。

「ラーシャがやりたいくて言つから、やつてもらつただけですよ?」

「女の子にそういう」としたいくて思わせるとこが、すでにタラシじやないの」

「誰でもいってわけでもないんですけど」

「へえ?」

「ラーシャだからいいんです」

「姫さまあ」

ラーシャがハートを飛ばしながらアコラに「ロロロロ」とつぶやく。

アコラはニッコリ笑つてその頭を撫でてやる。カリカ・ラキアがその光景を半眼で見守つていた。

朝食がすむと、アコラは中庭に出た。

「 いない」

珍しくタリクの姿がない。いや、毎朝いるわけではないが、いな  
い方が稀。ここで寝泊まりしてるとかというぐらい、大抵にこじい  
る。ちゃんと部屋もあてがつているといふの。」

「ラディンも来ないな」

アコラが外に出ると、犬のよつた恐ろしい嗅覚でかぎつけて現れ  
るはずの男も、まだやってこない。

「2人で何かやつてるのか?」

アコラが何の気なしにつぶやいた、そのとき

「まあ、お聞きになつて、皆様!」

女官が数人、茂みから立ち上がつた。

「聞きましたわ!」

「ラディン様とタリク様がお2人で!」

「姫様に内緒で!」

「1つの寝台で仲良くお眠りあそばしていらっしゃるなんて!」

アコラがガクッと肩を落とす。

「なぜそうなる?」

「あら、いやですわ。お2人で姫様に内緒だなんて、そういうこと  
に決まつてるじゃないですか」

1人が頬を赤らめ、身をくねらせる。他も同じようにキャーキャ  
ー言いながらクネクネと……。

アコラはムツと唇をとがらせた。

「そんな事実はない」

きつぱり否定すると、その場を後にした。

王宮の一角、近衛隊の宿舎がラディンの住居だ。アコラ付とい  
うだけで、元々ラディンは近衛の一員である。

アコラは遠慮なく部屋まで行くと、声もかけずに扉を開けた。が、

その姿はない。

「ホラ、やつぱりいないじゃないか」  
べつに女官たちの言葉を信じたわけじゃないが、とアコラは誰に  
ともなく一人つぶやく。

「となると、やつぱりあそこか？」

アコラは部屋を出て、次の田標に向かつた。

宿舎に隣接して、演習場がある。アコラが着いたときは一度朝の  
訓練中だった。

「おはよう」

声をかけると、咄一斉に振り返る。

「姫様、おはようござります！」

訓練用の剣を置き、一礼。そして、すぐに訓練に戻る。

「いらっしゃへおいでになるのは、久しづりですね」

サキール隊長がこやかに笑いながら近づいてきた。

近衛隊はどちらかといつと典礼など華やかな場の護りが多いので、  
見た目の良い若者が選ばれる。サキールもその隊長らしく、人目を  
惹く容姿だ。もつとも、ラティンほど恵まれてはいないが。

「うん、ラティンが来てないかと思つて」

「珍しいですね。姫のほうがあいつをお搜しとは」

サキールがクスッと笑う。

「ラティンから聞いてますよ。最近は市場がお好きで、よくお出か  
けとか」

「うん、まあ……」

「民に混じり、暮らしへぶりをその田で見られる」とは決して悪いこ  
とではございません。が、警護の面では少々……」

「ラティンがいるから大丈夫だ」

アコラが田を泳がせる。サキールはそれを見逃さず、ニッコリと  
笑つた。

「では、ちゃんとあいつを連れていくてくださいよ。まいたりなさ

「うす！」

「どうして知ってる？」

「もちろん、隊員には報告の義務がありますから」

「う……」

「特に、あれは私の弟ですし」

あまり弟を困らせないで下さいと、サキールがとどめを刺す。アコラは思わず一步下がった。

サキールの兄バカぶりは有名だ。女官たちの中にはそれをネタにしている者さえいる。タリクが来てからは下火になつたが、今尚健在だ。

「分かつた。気をつける」

アコラは苦笑いしながらうなずいた。サキールがニッコリ笑う。空気はやわらいだが、まだなんとなく寒い。

「で、ラディンはここに来てないんだな？」

「一度顔を見せたあと、侍従長に呼ばれて中宮へ行きました」

「中宮へ？ 兄上はご不在なのに？」

「ですから、お戻りになるのでしよう」

支度のためにかり出されたのだと囁つ。だが、そこから先、アコラは聞いたことがないなかつた。

「兄上がお戻りなのか？」

キラキラと目を輝かせて、ガバッとサキールの服をつかむ。

「いえ、まだですが」

「お戻りになるんだな？」

「はい……」

「兄上ー！」

アコラは弾むような足取りで出て行つた。

「お可愛らしい方だ」

見送つて、サキールがクスッと笑う。

「ラディンもあれくらい私を慕ってくれれば嬉しいんだが」

隊長の言葉は正しく独り言と処理され、口をはさむ者はなかつた。

王宮は大きく中宮セライムルクと後宮ハレムに分けられる。中宮は政務の場であり、王の昼の居間である。対して、後宮は女たちの住まいであり、王の夜の居間である。ちなみに、前者は女人禁制、後者は男子禁制だ。だが、アコラはそんなことなど一切気にせず中宮に乗り込むと、王の私室に飛び込んだ。

「兄上つ！」

「うわつ」

「あ、なんだラティンか」

兄と思って飛びついたその人は、その以前に搜していた男。アコラはすみやかに離れると、唇をとがらせた。

「どうしてお前がここにいる？」

まぎわらしい……と、アコラがぶつぶつ文句を垂れる。ラティンのこめかみがピクッと引きつった。

「そういうあなたこそ、ここがどこだか分かつておいでですか？」

「兄上の部屋だ」

「そうです、『中宮』にある『陛下の居間』です。姫が出入りなさつて良い場所ではありません。早く後宮へお戻りください」  
「分かつてないのはお前だ、ラティン。兄上は私がここに出入りすることを許してください。問題ない」

「それは陛下がいらっしゃるときの話です！ 『不在のときはダメです！』

「なんだ、まだお戻りじゃないのか？」

「はい」

間髪入れず返されて、アコラがしょんぼりと肩を落とした。

「どうか、まだか……」

「でも、昼までにはお戻りになると思いますよ」

アコラがパツと顔を上げた。

「本當か？」

「先触れの言い方からして、それぐらいかと」

「じゃあ、皿ばい一緒に食べられるかな？」

「台所にそのように伝えておきましょ」

「ありがとう、ラティン！」

アコラが顔を輝かせ、ラティンに飛びつぐ。ラティンは硬直した。「あの、姫様、そういうわけですから、私はこちらで陛下をお迎えする支度をせねばなりません。申し訳ございませんが、今日は姫様にお供できませんので、お部屋でおとなしくしておいてください」「外へ行くなと」「とか？」

「はい」

せつかくなおつたアコラの機嫌がまた一気に降下する。ラティンから離れると、アコラはその顔を敵でも見るような視線で見上げた。「そんな顔なさっても無駄ですよ」

ラティンも負けてはいない。皿をキリッと上げて見返す。「分かった。じゃあ、せつかくだから兄上のお戻りを祝つて舞を披露することにする。今日はおとなしくその練習をしておく」「それは良いお考えですね。陛下も喜ばれますよ」

「うん！」

アコラは一ヶ口笑うと踵を返した。

「あ、ところで」

部屋を出る際に、振り返つて尋ねる。

「タリクを見なかつたか？」

反射的にラティンの顔が険しくなる。

「どうして私がいちいちあいつの行動を把握してなきやならないんです？」

「知つてゐるか聞いただけじゃないか。怒りなくてもいいだろ？」「知りません！」

だから、どうしてそんなに怒るのだろう。アコラは笑いたいのを必死にこらえながら、部屋を出た。

戻る前に、庭に立ち寄る。

「あ、いた」

今度はタリクの姿があった。座って、何か考えているような……  
と思ってよく見ると、黒猫のカラと遊んでいるだけだった。

「タリク」

呼びかけながら近づく。タリクが顔を上げ、カラも愛想よく鳴いた。

「おはよう」

「おはよう。今日は遅い登場だな」

タリクが軽く口角を上げる。アユラも負けじとニンマリ笑った。

「お前じゃ。さつき通つたときはいなかつたくせに」

「ああ、今日は寝坊したからな」

「何かしてたのか？」

「別に」

「まさか、ラティンと一緒にだつたとか？」

「お前も大分毒されてきたな」

タリクがクツと喉を鳴らす。

「女宮たちには悪いが、あいつどいつもうなんて、考えたこともな

い

「その割には、よく絡んでる」

「面白いからな」

「ふーん」

「何かあったのか？ 元気がないな」

そう言われて、アユラは大きくため息をついた。そして、タリクの隣に座る。そこにいたカラがあわてて飛び退いた。

「兄上が帰つてこられる」

「どこかに行つてたのか？」

「言わなかつたか？ 港の視察だ」

「ふーん」

大陸内部はティンパーロン砂漠が広がっている。だが、その面積の3分の2近くを占めるのは、実は2つの湖だ。

東側にティンロー、西側はハールーン。ティンローのほうが大きくて、これを渡るだけで砂漠のほぼ中央まで進むことができる。そこで一度陸に上がり、2日ほど歩いて次のハールーンの港からまた水路を行く。これで砂漠の3分の2は横断したことになる。

湖の沿岸にはオアシスが点在していて、それぞれ都市国家を成している。ペルージャもそうした国の1つだが、特にティンローとハールーンの中間に位置し、両方の港を押さえているため、他の国よりも繁栄している。

交通の要衝を押さえることはすなわち、人も物も金も常に集まるからだ。だからこそ、国王は定期的に2つの港を視察して回る。今回もティンロー側のマゼラス港へ赴いた帰りだ。

「それで、どうしてそんなにしょげてるんだ？ 兄上とは仲良しじゃないか。嬉しくないのか？」

「嬉しいに決まってるじゃないか。いつもお土産を持つて帰つてくれるし、他国のおもしろい話も聞かせてくれる。すごく楽しみだ。ただ……」

アユラはフウとため息をつくと、立てた膝に顎を乗せた。

「私はそうやって、ただお帰りを待つことしかできない。男ならご一緒することもできるし、逆に、もう一方の港を視察して、兄上のご負担を減らすことだってできる。女だから、何のお力にもなれないくて……それが歯がゆい」

「ああ、だから男に生まれたかったなんて言つてたのか」

タリクがそう言つと、アユラは「クリとうなずいた。

「確かに、お前の言うことも分かるけど」

タリクは小さく笑うと、アユラの頭にポンと手を置いた。アユラが顔を上げ、彼を見る。

「でも、べつに女だつていいじゃないか。ついて行きたいなら、ついて行けばいい。お前は中富にだつて平氣で出入りできるんだから、男女の別など関係なく、兄を補佐する人間になれるだろ?」

「本當か?」

「まあ、言つだけ言つてみたらどうだ? 行動に移さなくては、なるものもならないからな」

「うん!」

アユラの顔に笑みが戻つた。

「なんだか、タリクも兄上みたいだ」

「そうか?」

「タリクは、兄弟いないのか?」

「さて……」

タリクは視線を外すと首をかしげた。

「いたような氣もするし、いなかつたような氣もするし」

「思い出せないか?」

「そのようだ」

「あいかわらず、名前と来た方向だけか

「ただ、思い出そつとすると大体頭痛がするんだが、今は痛くないな」

「え?」

「兄弟や家族のことを考えても、頭痛がしない」

「それつて、つまり」

「元々いないのかもな。とこりことは、俺は天涯孤独とこりやつだつたのか」

「だつたら、ますます好都合だ。このままこの國に住んでしまえ」

「簡単に言つたな、お前は。本当に」

タリクがクスクスと笑う。アユラは身を乗り出すと、彼の服を掴んだ。

「思い出せない過去なら捨てたつていいじゃないか。それより、こにお前を必要とする人間がいるんだから、新しく生き直せばいい。

ラティンに聞いたが、そこそこ剣は使えるんだろ？ だったら近衛に入ればいい。お前の容姿なら問題なしだ」「いきなり近衛隊は無理だろ？ まずは軍属になって、それからじやないか？」

「私が推薦する」

「アコラ、いくら気に入った人間だからといって、上に立つ者が手順を無視して物事を進めてはダメだ」

「でも……」

「ラーシャのときも、それでラティンに怒られたろ？ 忘れたか？」

「う……」

「お前の裏表のない言動は魅力的だが、度が過ぎると諸刃の剣だ。使い方をよく学ぶんだな」

「分かった」

アコラは「クリと素直にうなづいた。

いつもの毎食時間を少し回った頃、前庭で王の帰還を告げる声が上がった。

「兄上！」

聞きつけたアコラが顔を輝かせてそちらへ向かう。進路上にいた者達があわてて道を空ける。

「兄上、お帰りなさいませ！」

そして、その姿を見つけるなり飛びついた。

「ただいま、アコラ」

背中に張り付く妹に向けて、低い豊かな声がかかる。ついで、頭にふわりと手が置かれ、軽くポンポンと弾ませる。アコラは顔を上げ、兄を見た。

赤みの強い髪、柔らかな茶色の瞳は、大多数の国民に共通だ。アコラと似ているのは、強いて言つなら顔立ちか。キリッとした、線の際立つ田鼻立ち。

2人の共通点と差異は、母が異なる故だ。

「旅はいかがでしたか？ 早くお話を聞かせてください！」

アコラが目を輝かせる。セイラムはその顔を見つめて、小さく笑う。

「今回は、あまり楽しい話はないが。おいで。食事しながら聞かせてやるわ」「ありがとうございます！」

アコラは兄と腕を絡めたまま、城内へ入った。

「ホラ、土産だ」

そう言ってセイラムが取り出したのは、1冊の本。濃紺を基調と

して鮮やかな色糸をふんだんに使い、繊細な柄を描き出した織物で表装されている。

「わあ、すごい綺麗です！」

アコラは目を輝かせながら、しばらくその表装を眺め、細かな柄を指先で追つた。滑らかな質感。縄だ。

「ちょうど、バスラからの船が着いたところで、色々と面白い品があつた。ティンロー周辺の国を順に巡り、商いしているらしい」「バスラ！道理で、手の込んだ品だと思った」

大陸東部を版図とし、最古の歴史を誇る大国。いまだ何者の侵略も許さぬその王都ラフラバードには、長い年月の間に培われた高い技術と美に彩られた文物があふれている。

「あ、これ、アルミダ王子の冒険譚だ！この話、大好きです！」題名を読み取つて、アコラがますます目を輝かせる。セイラムが

クスッと笑つた。

「小さい頃、よく読み聞かせてやつたな」

「特に、クーロン山脈に迷い込み、白い虎に助けられる話が大好きで……あ、これ、その話だ！」

「良かつた、記憶が間違つてなくて」

セイラムがホツと息をつくその横で、アコラはもう頁をめくつている。流麗な筆致や余白を飾る紋様の美しさにもため息が出る。そんな妹の姿を、セイラムがほほ笑ましく見つめる。

「ありがとうございます、兄上。大事にします！」

「ん」

「昼食をお持ちしました」

その頃合で、小姓たちが膳を運び込む。

「カリカ・ラキアはまだか？」

「ただいま支度中でいらっしゃいます。まもなくお渡りになられるかと」

「そうか。では、先に食べ始めるとしよう」

セイラムが食事前の祈りを促す。アコラはそれに従つた。

「それで、その男はどうなったのですか？」

アコラはケバブの串を握りしめながら身を乗り出す。

「きっとお前が喜ぶだろうと思つて招待しておいた。そのうち現れるだろ？」「

「同行していたのですか？」

兄の姿しか目に入れてなかつたので、気づかなかつた。

「いや、別だ。マゼラスをもう少し見たいらしい。あきたら都へ来ると言つていた」

「楽しみです！」

セイラムはその顔を見て、軽く口角を上げた。

「他に、なにかありませんか？」

「これで全部だ」

「今日は、あまり楽しいものではなかつたんですね」

「視察は、遊びではないんだよ」

セイラムが苦笑する。たまたま今回はじつもよう土産にできる話が少ないだけだ、と。

アコラは一度視線を外した。それから思い切つて兄を見つめなし、口を開く。

「楽しい話でなくともかまいません」

「とは？」

セイラムが眉をひそめる。

「マゼラスで兄上が見聞きされた」と、ありのままを知りたいんです

「なぜ、そんなことを知りたがる？」

「兄上のお役に立ちたいと思うから」

「気持ちだけで良い」

セイラムは妹をまつすぐ見つめると、言い聞かせるように告げる。

「お前やカリカ・ラキアの笑い、楽しく過ぐす姿を見るのが、何よりの励みだ。難しい顔などしてほしくない」

「義姉上と私は違います！」

「思いあがるな、アコラ。お前もカリカ・ラキアも、私の護りの内だ」

「でも、私は王家の生まれです。兄上と一緒にこの国を、民を護りたいんです！」

「人手なら間に合っている」

「どうしてダメなんですか？ 女だからですか？」

「言わずもがなのことを聞くな」

口調こそ穏やかだが、とりつく島のない言葉。アコラはキュッと唇をかんだ。

「やつぱり、男に生まれたかった」

ぱつりとこぼし、部屋を出て行つた。

妹の後ろ姿を見送つて、セイラムが、やれやれ、とばかりに首を振る。そのとき。

「もう少し言い様があるでしょ！」

紗幕をぐぐつて、カリカ・ラキアが現れる。そのクスクスと笑う様を見て、セイラムは溜息をついた。

「アコラは己を知らなさすぎる。男に生まれたかった？ ああ、男に生まれていれば、あいつこそが王だった」

アコラは妃の子、セイラムは夫人の子だ。共に男なら、生まれの順に限らず、アコラが世継ぎとなるところ。

「もつたといない。あいつこそ王にふさわしいのに。見た目も、中身も……民が求める王の像そのもの」

「そうね。少なくとも、あの子は誰かさんみみたいに自分は王の器じゃないとか、王になりたくなかつたとか、グチグチ言わないでしょうしね」

「カリカ・ラキア」

「はい？」

「俺はただ書物を読み、この大陸の歴史を学びたかっただけなんだ」

「知つてゐるわ」

「欲しいならくれてやる。王の座など重いだけ。でも、アコラにはやらない」

「女だから？」

「違う。あこいつはあのまま自由に、思つまま生きさせてやりたい。こんな重荷をあいつに背負わせたくない」

「結局、あの子がかわいくてしかないくせに。それならやうと言えばいいのよ。どうして誤解を招く言い方しかできないのかしりねえ」

「言つてろ」

「はこはい、しようのない人」

カリカ・ラキアはクスッと笑つと、セイラムを抱き寄せた。

「疲れてるのね。ゆつくりお休みなさい」

幼子をあやすように、カリカ・ラキアが彼の背を撫でる。セイラムは身を任せ、目を閉じた。

「バスラが動いたぞ」

「え？」

「ティンロー周辺で残るのは、もう我が国だけだ」

セイラムはそれきり口を閉ざした。

「姫？」

アユラが廊下を走り去るのを、ラディンが見咎める。黙つて後を追つた。

アユラは中庭の円亭で止まつた。肩を落とし、うなだれた後ろ姿が痛々しい。

「姫、どうかなさつたのですか？」

ラディンが声をかける。振り返つたアユラの目は、心なしか潤んでいる。

「なんでもない」

「そんなふうに見えませんが？」

ラディンは小さくため息をつくと、彼女のそばに寄つた。アユラは視線を外し、またうつむく。

ラディンはその腕の中に1冊の本を認めた。アユラが大事そうに抱えるそれは、ラディンも初めて見るものだ。

「美しい本ですね」

おもわず声に出すと、アユラの肩がピクッと跳ねた。

「だらう？ 兄上のお土産だ！」

アユラはわざとらしいくらい声を弾ませ、答える。

「バスラの商人から買い求めてくださつたんだ。しかも、私の好きなアルミダ王子の冒険譚だぞ！」

「それは良かつたですね」

ラディンがほほ笑むと、アユラも笑つた。だが、すぐにその顔がくもる。

「私はバカだ」

ポツリとこぼす。

「兄上のお力になりたいのに、兄上を怒らせてしまった」

「姫？」

「兄上に嫌われたかもしれない……」

本を強く抱きしめ、肩を震わせる。すぐに嗚咽が聞こえてきた。ラディンは驚きのあまり固まってしまう。

「そこ、何をポケツとしてる」

そのとき、茶化すような声が聞こえてきた。

「泣いてる女の子は抱きしめてやるもんだ」

「タリク」

ラディンが額に青筋を浮かべ、その男をキッとにらみつけた。タリクがおもしろそうに見返してくれる。

「相手が姫でも主でもいいじゃないか。ホラ、早くしり

「う、うるさい、黙れ！」

ラディンが怒鳴る。それで、アコラも我に返つた。

「タリク、ダメだった。やっぱり、女では兄上の力になれないらし  
い」

「そうか。残念だな」

「うん……」

アコラは小さくうなずくと、その場から走り去つた。ラディンが後を追いかけようとして、思いどどまる。それから、タリクを振り返つた。

「返つた。

「ん？」

タリクがおもしろうに彼を見返す。

「お前、姫に何を言つたんだ？」

「兄上の力になりたこと言つから、正直にそう伝えてみると言つただけだが」

「余計なことを…」

「そうか？」

タリクが首をかしげる。ラディンは彼に駆け寄ると、その襟元を掴んだ。

「女性が政務に口をはさむことはできない。他はどうか知らないが、我が国では厳しく戒められているんだ。それを…」

「アユラは中宮にも出入りしているし、そのあたりは甘いのかと思つたんだ」

「事情も知らぬ人間が軽はずみに口を挟むな！」

姫がどんなに傷ついたか、とラディンが目を伏せる。それから、またタリクを強くにらみつけた。

「いいか、一度と余計なことは言つな。黙つておとなしく庭の片隅に寝ておけ！」

「そつは言つてもな。何が余計なことか分からぬから、多分また何か言つてしまふだらうな」

「だから、黙つて寝ていろと言つてるー。次にこんなことがあれば、私はお前を許さない」

「怖い怖い」

タリクがクツと喉を鳴らす。ラディンは反射的に手を挙げそうになつて、グッと堪えた。

乱暴に彼を放す。

「今日はもう一度とその顔を見せるな

「随分嫌われたな」

「お前など、元から大嫌いだ！」

言い放つと、ラディンもその場を走り去つた。

「大嫌いときたか。痴話ゲンカみたいだな」

タリクはその背を見送りながら、愉快そうにクスクスと笑つた。

アユラは後宮の自分の部屋へ戻つた。絨毯の上に座り、深いため息をつく。

（分かつてたけど、かなりきつい……）

自分が相当甘く考えていたことに、改めて気付いた。

ペルージャでは、かつて女王の時代が3度あつた。そのどれも執政が著しく乱れ、最後の女王のときには他国の侵略を受け、存亡の

危機に立たされている。

以来、女王は禁忌となつた。政務に携わること自体禁止され、中富から完全に遠ざけられた。

だからこそ、中富に出入りできるアコラは異例であり、それを許した王に危険を感じる臣下も多い。それと知っているから、ラティンはつるさく叱るのだが、アコラは今まであまり気にしていなかつた。

「姫さま？」

ラーシャが紗幕の影から顔を出す。

「泣いてらっしゃるんですか？」

「泣いてないよ。ただ、ちょっと悲しいだけ」

アコラは顔を上げると、無理に笑つてみせた。そのとき、カラが飛び出してアコラの膝に擦り寄る。アコラは本を傍らに置くと、カラを抱き上げた。

「姫様、舞の練習しましょ？」

「え？」

「王様に見ていただくんでしょ？ わたし、いいこと思いつきました！」

ラーシャはニコニコ笑いながらアコラの手を取る。カラが抗議の声を上げながら飛び降りた。

「いきましょ！」

「どこへ？」

「市場です！」

ラーシャに強く引っ張られて、アコラはワケが分からぬまま連れ出された。

後富を出たところでラティンに出てわす。

「姫、どうひへ？」

「市だ！」

「なつ！ 市はダメと何度も言つたら……」

「いいから、お前も来い！」

さつきまで泣きそだつた顔が、もう笑つてゐる。それは良いとして、一体、市場へ行つて何をするのだ。ラディンもワケが分からぬまま、とにかく後を追つた。

さらに、その途中でタリクも拾つ。

「なんでお前までついてくるんだ！」

ラディンが呟える。

「アコラが来いと言つから

「いいが、絶対余計なことは言つな、見るな、聞くな！」

「走りながらわめくと、舌を噛むぞ」

「噛ま

「…」

「ほら、噛んだ」

タリクがニヤリと笑う。ラディンは口許を押さえながら、彼をキツとにらみつける。その目には涙。

「何やつてるんだ、ラディン」

アコラが振り返り、爆笑した。

日が落ち、夕食の時間となる。

常にはセイラムが後宮へやつてきて、広間にてカリカ・ラキア、アコラと共に摂る。献立は慎ましく、特別な余興もない。

ただ、今日はセイラムが視察から戻ったことと、アコラへの詫びの意味をこめて、宴の予定となつていた。

だが、肝心のアコラがまだ戻っていない。外出したままだ。

「ラティンとタリクを伴つてゐるので、おかしなことにはなつてないと思ひますが」

サキールが報告する。セイラムは「そうか」と告げ、小さくため息をついた。

「お迎えに行つてみましようか?」

「行き先は分かるのか?」

「おそらく市と」

「まあいい。もうしばらく待つて、それからで」

そのとき、表の庭のまづからに、さやかな音楽が聞こえてきた。

「なんだ?」

「報告させます」

サキールが合図しようとしたそのとき、ラティンが現れた。

「姫はご一緒ではないのか?」

サキールがいぶかしむと、ラティンは一ヶ口笑つて王の前にひざまずいた。

「陛下、今宵の余興にと、姫が演出なさいました。どうぞ表の広場にお越しください

「そういうことか」

いかにも民が好みそうな音楽だと思つたら、セイラムは苦笑する

と、ラティンの案内に従つた。

騒ぎを聞きつけた役人や富仕えの者たちが次々と集まつてくる。

そこへセイラムが現れると、皆道を空け、前へ通した。

表の広場は国の祭礼などに使われる公の場だ。その際には広く民にも開かれ、酒食が振る舞われたりする。そこに、アコラは市場周辺で集めた、にわかごしらえの歌舞団を引き入れていた。

シタールやタブラなどちゃんとした楽器もあるが、大半は適当に作った笛や鳴り物のようだ。時折調子外れな音が混じるが、それもまた一興。にぎやかに、楽しく、流行りの歌曲など奏でている。ラーシャの案内で、カリカ・ラキアと女官の一団も到着した。

「にぎやかね」

「まるで酒場だ」

「いいじゃない、楽しいもの」

カリカ・ラキアがクスクスと笑う。セイラムは苦笑した。

数人の男女が踊り始めた。組になつたり、離れたりと忙しい。その中に、アコラとタリクの姿もある。

アコラは元々踊りが得意だが、タリクも中々堂に入つていい。もつとも、民が祝い事などの折に舞う素朴な踊りだ。複雑な振り付けではないが。

「兄上！」

アコラがその姿に気付き、動きを止めた。皆にはそのまま続けるよう指示し、自分は兄の前に進む。

膝をつき、頭を下げる。その半身後ろでラティンもひざまずいた。

「お許しも得ず、勝手に皆を引き入れて申し訳ございません」

「本来なら叱るところだが、今宵は許そう。民の楽しそうな顔を見られたこと、嬉しく思うぞ」

セイラムがそう告げると、アコラは勢いよく顔を上げた。満面の笑みを浮かべる。

「では、とつておきの出し物です。ラーシャー！」

「はーー！」

アコラに呼ばれて、ラーシャが楽団の前に立つ。手を振つて一度

演奏を止めさせると、アコラを振り返った。

アコラがうなずく。ラーシャは楽団に視線を戻し、合図を送った。うつてかわって、優しいゆつたりとした音楽が始まる。ラーシャがそれに併せて歌う。その歌声だけでも、見物人たちの間から感嘆の吐息がもれるのに……。

アコラが踊りだした。指先まで意思の通つた細やかな手の動き、柔らかな身のこなし。情感あふれる舞に、皆、目を見張る。セイラムも少なからず驚いていた。男舞しか見せたことのない妹が、こんなふうにも舞えるなんて。

「お前は、知つていたか？」

「いいえ、初めて見るわ」

カリカ・ラキアも感心している。

「こんなふうにしていれば、『青い華』の譬えどおり、麗しい姫君なのよねえ」

もう何年かすれば、求婚者が列を成すに違いない。カリカ・ラキアがそう言うと、セイラムが眉をひそめる。

「だとしても、あいつには良い縁を結んでやりたい」アコラの望まぬ相手、泣かせるような男には絶対嫁がせない。セイラムがそんなことをつぶやいている目の前で、ラディンがアコラの手を取つた。そのまま組んで踊りだす。

「あつ」

セイラムがとつさに上げた声は悲鳴にも似て……。

「兄バカなんだから」

カリカ・ラキアがヅッと吹き出す。セイラムはバツが悪そうに唇を曲げた。

見目麗しい男女の組舞に、見物人からはため息しか上がらない。美しいものが大好きな女官たちも、うつとりと見つめている。

一区切りついたところで2人が離れる。そのときを待つていたかのように、今度はタリクがアコラの手を

「キャーっつっ！」

女官たちが我に返つて大歓声を上げる。

「あーっ！！」

それに負けないぐらいいの悲鳴を上げたのはサキールだ。

そう、タリクはアユラではなく、なぜかラティンの手を取つていた。

「おい……？」

ラティンが険悪な声を出す。

「ここで俺がアユラの手を取つたら、王に殺されかねないからな」「だからって、どうして私を……」「ア、放せ！」

タリクは抗議を無視すると、強引に彼を女役にして踊りだした。呆然と見ていたアユラが笑い出す。ラーシャは歌うのをやめ、楽団はおもしろがつてわざとテンポの速い、滑稽な曲に変えてくる。

「はーなーせーっつ！！」

ラティンがその手を振りほどこうと、懸命に暴れている。だが、タリクはその動きを巧みに利用し、踊つているように見せかける。器用というか何というか……。

だが、オチとして見るには格好の出し物だ。アユラをはじめ、見物人の大半には大受けで、皆腹を抱えて笑つている。

受けていると言えば、一部の女官たちにもだ。ただし、別の意味で。彼女らは蕩けた目で食い入るように見つめている。

完全に魂を持つていかれているらしい彼女らの様子に、カリカラキアが苦笑した。ふと横を見ると、セイラムが「ぞまあ見ろ」とばかりに、満面の笑みを浮かべている。

さらに、彼の後ろ、サキールの様子を伺うと

「おのれ、タリク！ 私のかわいい弟になんという不埒なマネを！」

「！」

「隊長、堪えてください！」

「陛下の御前です、お控えください！」

今にも抜剣しそうな隊長を、部下たちが必死に抑えている。

「どれだけ兄バカなのよ」

カリカ・ラキアは一気に脱力した。

王の指示で、急遽集つた者すべてに酒食が振る舞われた。そうして、時ならぬ宴は夜中まで続いたといつ。今なお、ペルージヤは平和である。

終

セ.....

「う.....」

「.....」

「あ、あ.....つ」

「ロロロ」

『殺せつー』

「つ！」

ガバッと起き上がり、そのまま荒い息をつく。

（今は.....？）

タリクの背を冷たいものが流れる。  
いやな夢。

暗い、暗い、どこまでも真っ暗な空間で、ただその声だけが響いていた。無機質な平たい声が、ただ「殺せ」とだけ。

（でも、俺は.....）

その声を知っている

体が重い。特に下腹の辺り。得体の知れぬ不快感に、起き上がるのも億劫だ。

しかも、心なしか体が熱い気がする。

（熱とか？）

アコラは寝台に転がったまま天井を仰ぎ、ため息をつく。  
仮に発熱だとして、だったら、この下腹の痛み.....というか、不

快な重さはなんだらか。もう少し上で、吐き飯もあれば、食あたりかと見当をつけるところだが。

「これは、かつて味わったことのない不調。

（とりあえず、典医を呼んできてもらおう）

「ラーシャ」

寝そべったまま声をかけると、ほどなくしてパタパタと軽い足音が近づいてきた。

「おはようございます、姫様」

語尾にハートマークを飛ばしながら、ラーシャが紗幕を上げて顔をのぞかせる。とたん、首をかしげた。

「おはよう……ではないですか、姫様？」

「んー、おはようなんだけど……ちょっと調子が悪くて」

「大変っ！ どこがへんですか？ 頭？ おなか？」

「下腹」

「どんなふうですか？」

「重い。で、体がなんとなく熱っぽい」

「下腹……重い……あ、もしかして！」

「？」

「姫様、それは」

耳許でラーシャの告げた「病名」に、アコラが目を見張る。

「うそだろ？」

「着替えるときに見れば分かります。ていうか、姫様、まだだつたんですか？」

「うん」

「わたしでももうなつてるのに？」

「えつ、それは早すぎないか！？」

「こんなもんですよ。姫様が遅いんです」

「う……」

そう言われては一の句が告げないアコラであった。

「あらあら、ついに始まっちゃつたの」

「『女』になど、なりたくはなかつたです」

「こればっかりは仕方ないわねえ」

心底辟易しているらしいうアユラを見て、カリカ・ラキアがため息をついた。

女として生まれたからには、これは避けて通れぬ道。いつまでも子供のままではいられない。

これでも、アユラは遅いほうだ。齢14といえば、とつぐに初潮を迎えている。早い者なら、すでに子供の1人も産んでいる年だ。

「最近、なんとなく娘らしくなってきたなと思つてはいたけど」

そう、始まつたの……と、カリカ・ラキアがつぶやく。アユラはムスッと口をとがらせたままだ。

「ホラ、いつまでもそんな顔をしてないの。あなたの気持ちは分からなくもないけど、一応これはおめでたいことよ。これで、あなたも晴れて一人前の人になつたのだから」

「だから、イヤなんです。成人してしまえば、本当に女として扱われる。もう、中宮に出入りすることもできない。今までのようにも、気安く兄上のおそばにいけない！」

「そうね。あなたの我がままは、すべて子供であつたからこそ許されていた。女になつてしまえば、家から出ることは叶わない。良家の女は、本当に不自由だわね」

「ラディンにもタリクにも会えない。剣も持たせてもらえない。市にも降りられない！」

我慢の極に達したが、アユラの目から涙が溢れ出した。カリカ・ラキアは義妹をそつと抱き寄せる、その背を撫でた。

年長の女には分かつていた。かつて、自分も通つた道だから。

最初は誰でもそうなのだ。己の体の変化に戸惑い、得体の知れぬ不安に襲われ、情緒不安定になる。ことに、アユラは男に生まれたかつたと豪語していただけに、ショックも大きいだろう。落ち着くには時間がかかるかもしれないが、あまり刺激せずに見守るしかな

い。

ともあれ、セイラムには伝えなくてはと、カリカ・ラキアは段取りを頭の中で思い描いた。

「ここが麗しの都か

1人の青年がまぶしそうに王城を見上げている。

薄汚れてはいるが造りのしっかりとしたローブに身を包み、大きな袋とサズ（弦楽器の1種）を肩に担いでいる。フードの下からのぞく顔は20歳前後くらい、琥珀色の瞳は好奇心旺盛な輝きだ。

「では、参るとしましょうか」

袋を担ぎなおすと、青年は城垣指して丘を登りだした。

「陛下、カリームと名乗るサズ弾きが参つておりますが」侍従が首をかしげて告げるのに、セイラムはニッと笑つて答えた。  
「やつと来たか。あれから半月たつから、もう来ないのかと思ったが

「何者でござりますか？」

「先だつてマゼラスに視察した折、見つけた。語りもやつてゐるじくてな。アコラが好みそだから、招いておいたのだ」

「そのような得体の知れぬ者を……」

「マゼラスには諸国の船が集まつてくる。荷だけでなく、人もまた流れてくるのだ。いちいち疑つていてはきりが無いわ

「ですが」

「いいから、中へ入れてやれ。近衛の1人でも見張りにつけておけば、そうそう悪さもできんだろうよ」

「かしこまりました」

侍従は不承ながらもその言葉に従つた。

「さて」

セイラムはきつのいいところで執務を切り上げると、後宮に向かつた。

カリカ・ラキアから話があると言っていたから、ついでにカリームのことを知らせてやるつもりだった。

後宮は、妙に慌しかった。バタバタと走り回る女官に何人ぶつかりそうになつたことか。

「何があつたのか？」

セイラムが開口一番尋ねると、カリカ・ラキアは苦笑した。

「ああ、『じめんなさい』。めでた事で、皆浮き足立つてしまつてゐるのだから」

「めでたいこと……まさか」

セイラムが期待に目を輝かせたので、カリカ・ラキアはあわてて手を振つた。

「ああ、違うの、それじゃないわ。まぎらわしい言い方をして『じめんなさい』

「では？」

「アコラよ。初潮を迎えたわ」

「来たのか、ついに」

セイラムもまた複雑な色をその瞳に浮かべた。

「確かに、人としてはめでたいこと。身内ならば祝つてやるべきだらうが」

「あら、あなたまで素直に喜べないの？」

兄バカのせいかと思つてカリカ・ラキアは笑おうとしたが、どうもそれだけではないらしいことを瞬時に察する。

ややあって、セイラムが小さくため息をついた。

「幾つか縁談が来ている。あいつがまだ成人していないことを理由に断つてきたんだが」

「これで断る理由がなくなつた、といつゝとらしい」

「良い話は一つもないということ？」

「我が国の富をねらうもの、バスラの脅威に備えるため手を組もう」というもの。そんなものばかりだ」

「王家の女の宿命ね」

カリカ・ラキアもまたため息をついた。

「とりあえず、今夜は祝いの宴なのだけど、あなたはどうするの？」  
「出る。せつかくカリームが来たのに、俺がいなければ後宮に入れんからな。あいつの語りで、少しはアコラの気もまぎれればいいが」「そうね」

それよりも多分、今までどおり自由に王城内を駆け回り、市に降り、ラディンらと会う許可を貰えてやつたほうが気も晴れると思うが。カリカ・ラキアはそう思つたが、あえて口にしなかった。

今日はどうやらアーノの「お出かけ」はないらしい。いつまでもアーノが出てこないので、ラティンはそつと見切りをつけた。

「何があつたのかな」

常日頃、脱け出すなと口やかましく言つてはいるが、いざ出でこないとなるとなにやら寂しくもある。いやそれより、彼女の身に何かあつたのかと、逆に心配になつてきたり。

侍女の一人でも捕まえて聞いてみようかと思つたが、それはそれで厄介なことになりそうだと気付く。

「これはこれは。珍しくラティン殿が暇そうだ」

こんな嫌味なことを言つ奴は一人しかいない。ラティンはムツと口をとがらせて振り返る。案の定、そこにはタリクがいた。

「だったら、何だ？」

「べつに？」

「いーや、絶対に何か言いたいに決まつてる」

「よく分かつたな」

「ついでに、何と言つつもりだつたか当てられるか？」

「知るか、そんなこと！」

ラティンが怒鳴ると、タリクは片方の口角を吊り上げた。そして、言つには

「お前、人を殺したいと思ったことはあるか？」

「ちょうど、今そう思つていたところだ」

「俺か？」

「よく分かつてるじゃないか」

ラティンも口角を上げて、ニッと笑つ。

「久しぶりに手合わせするか？」

「受けて立とう」

タリクが提案すると、ラティンも迷うことなく承知した。

兵舎の広場に時ならぬ人だかりができる。

輪の中心にいるのはラティンとタリク。それを近衛の兵士だけではなく、手持ち無沙汰な侍従や下男たちまでもが見守っている。

「今日はえらく本格的なんだな」

この2人、時々対戦しているが、いつもは防具すらつけずにケンカまがいの打ち合いをしているだけ。それが今日は訓練用の防具をつけ、木製の盾と剣を携えている。

「ついに決着つける気になつたのかな?」

「なんの?」

「姫様だよ」

「えーっ! ?」

「そこ、静かに見ていろ」

審判を任せられた副隊長がギロツとこらむ。ざわめきはピタリとやんだ。

「そういえば、隊長がいらっしゃらないな?」

「うん、さつきから気になつてたんだ、おれも」

弟が可愛くて仕方ない近衛隊長サキールの姿がない。こんな大々的な場なら、当然立ち会いそうなものなのに。

「隊長なら、勝負次第で流血沙汰になりかねないからと、部屋に閉じ込めてきたらしいぞ」

「え?」

「と、副隊長が言つてた」

「あー……」

誰もが納得した。

「はじめ!」

副隊長の号令で、ラティンとタリクが身構えた。

両人とも隙の無い構えで相手の出方を探り合つ。先に動いたのは

タリクだ。まっすぐにラデインの懷へ飛び込んでいく。当然のようにラデインは左へ避け、かわしづま、タリクの背をねらつて剣を振り下ろした。

タリクは盾で背中をかばう。ラデインの剣が当たつた反動でそれを弾き飛ばし、振り向く。ラデインもすぐに体勢を直し、剣をふりかぶる。

しばらく打ち合いが続いた。

「そろそろラデインがボロを出すな」

直情的なラデインは打ち合いが続くと一点に集中してしまい、しばしば大極を見失う。本人も分かっているので、普通は先手必勝、すばやく相手の急所を突いて勝負をつける。タリクはその逆だ。じつくり相手の動きを見極め、疲れた頃合を見計らつて仕掛けていく。だから、タリクから攻撃を仕掛けるのは珍しいのだが、結局はいつものパターンに持ち込んだらしい。持久戦になるとラデインの負けだ。

そう、誰もが予想していたとき。

「あ

タリクの剣が飛んだ。

止めた刃をラデインが振り下ろす。タリクは盾も放り出して転ぶように脇へ退け、ラデインの足を引っ掛けた。

「わっ！」

ラデインが避け損ねてたらを踏む。かるうじて転倒だけは免れて振り返るも、そのときすでにタリクの拳が迫つている。それを、ラデインはとっさに両腕を交差させ、受け止めた。

「今日はねばるな」

タリクがニヤリと笑う。その余裕有りげな様子が憎らしい。ラデインはギリつと唇をかみ、渾身の力を込めて彼の拳を押し返した。「剣の勝負だと決つたくせに、殴り合いに持ち込むのは卑怯だぞ！」ラデインが叫ぶと、タリクは吹き出した。

「お前、戦場でそれは命取りだぞ。剣など、2人も殺せば血脂で使

い物にならん」

「ここは戦場じゃない！」

「だから甘い。ペルージャだけがいつまでも平和だと思つた」

「なつ！？」

タリクのその発言に、周囲でざわめきが起きる。

「いきなり何を言い出すかと思えば……」

誰かが鼻で笑えば、タリクはそちらを横目に見て哀れむようにため息をついた。

「確かに。平和なのはペルージャだけですね」

そのとき、輪の外からクスクスと笑う声が割つて入つた。自然と輪が割れ、道が出来る。

サズを背に担いだ青年がそこに立つていた。

「誰だ？」

「失礼しました。流れのサズ弾き、カリームと申します」

彼は自己紹介すると、ゆっくりと周囲の顔を見回した。

「言いたくはないですけどね。砂漠の内はすべて戦場です。そして、戦火はまもなくこの国にも達するでしょう。今の内、その御仁から戦場での戦い方を学ばれたほうがよいと思いますよ」

「なんだと……」

周囲の歯軋りも聞こえてきそうな緊張など気にせず、カリームは輪の中に入ってきた。2人の前に立ち、タリクを見て、ふと首をかしげる。

「あなたは……」

「？」

「あ、こんなところにいた！」

そのとき、兵士が1人、こちらに駆けて来た。

「そのサズ弾き、陛下がお待ちだ！」

「あ、そうだった。まだご挨拶もしてませんでした」

「というか、勝手に城内をうろつくんじゃない！」

「すいません」

まるで悪びれもせずに笑う青年を見て、誰もがガツクリと肩を落とした。

カリームが去る。その後ろ姿を見送って、ラディンがポツリと告げた。

「あいつ、お前に何か言いたそうだったな」

「ああ」

「もしかして、お前のこと知ってるんじゃないかな？」

「どうだろうな」

「聞いてみろよ。何か手がかりぐらいはつかめるかもしれないぞ」

「また会うことがあればな」

「ぬるい！ 自分のことだら、知りたくないのか？」

ラディンが彼の襟元を掴んで揺する。タリクはニッと口角の端を上げた。

「心配してくれてるのか？」

「だ……誰がっ！」

ラディンはあわてて彼を放すと、間合いを取つた。

「さつさと自分のことを思い出して、出て行ってほしいだけだ！」  
捨てゼリフを残し、道具を持って駆け去つた。

夜の帳が下りるころ、華やかな灯りが後宮の一角に灯った。

「あら、中々綺麗な顔をしてるわね」

カリカ・ラキアがほほ笑みかけると、カリームはふわりと笑った。湯浴みし、身支度を整えたカリームは確かに女性受けする端整な顔立ちをしていた。柔らかに波打つ金茶の髪と琥珀色の瞳、何より浅黒い肌が珍しく、女たちは興味津々で彼を見つめている。

浅黒い肌は南のジユート族に多い。

「確かに、彼ならアユラも気に入るでしょう。さすがはお兄様ですこと。好みをよく分かつていらっしゃるわ」

「茶化すな」

セイラムは軽く口を尖らせ、横を向いた。

女官たちがそれぞれに酒や前菜の盆を持ち、始まりの合図を待っている。一応今宵の宴はアユラが主役なので、彼女が来るまで始まらないのだが

「何か奏でておりましょつか？」

どこか居心地の悪い空気をなごまそつと、カリームが声をかける。セイラムがフウとため息をついた。

「しかたない、先に始めるか」

セイラムの合図で、女官たちが酒を注いで回る。

「では、アコラの成人を祝つて」

「おめでとうござります、陛下」

本人がいないのでどこか締まりのない乾杯となるも、それを合図にカリームはサズを奏で出した。

2曲弾いたところで、カリームは一回手を止めた。アユラの来る気配はまだなく、宴もなんだか白けた空気が漂い始めている。そのときになつて、ようやく入り口に人影が立つた。

「やつと来たか」

「お待たせしてすいません」

アコラはその場に膝をつき、頭を下げた。セイラムが許す旨告げると、アコラは顔を上げ、中へ入った。

髪は頭の中ほどで1つにまとめ、鮮やかな青石の櫛で留めている。うつすらと化粧も施して、大人の装いだ。体格こそまだ幼さが残るもの、もはや子供とは言えない1人の娘がそこにいる。

なるほど、と、カリームは心の中でつぶやいた。これは確かに美しい姫だ。政略だけで娶ろうと企む諸国の王達も、その目で実際に見れば、彼女自身を欲するだらう。

「では、今一度」

セイラムが杯を取ると、皆それに眉ひつ。

「アコラの成人を祝い、乾杯」

「乾杯」

アコラも杯を合わせて一口すすると、すぐにその場に置いて立ち上がつた。

「遅れたお詫びに、舞わせていただきます」

「なら、せつかくだ。カリームのサズで舞つてみるか？」

セイラムが提案する。アコラはそのとき初めて気付いたとばかりにカリームを見た。

「何ができる？」

「マゼラスで幾つか、お国の歌曲を仕入れてきました。それでよろしければ」

「なら、1つ頼む」

「かしこまりまして」

カリームが頭を下げるとい、アコラは「く淡い笑みを浮かべた。いつもとは違う妙に大人びた微笑に、周囲の者が一瞬息を呑む。

サズの奏で出した旋律は、賑やかではないものの、明るい柔らかな調べだった。アコラはふわりと手をかざし、その調べに合わせて舞いだした。

しつとつと落ち着いた、美しい舞だ。誰からともなく吐息がもれる。

だが

「にゃーっ！」

ふいに、間の抜けた雄叫びを上げてアコラが手を止めた。

「アコラ？」

セイラムがいぶかしむよつて声をかける。他の者は呆気にとられて固まつたままだ。

アコラは肩で大きく息をつきながら、まつすぐ挑むよつて兄を見つめた。

「やつぱり、こんなのは私じゃなーっ！」

「は？」

「兄上、お願ひです。こぞといつときはちゃんと王家の女にふさわしく振る舞いますから、普段は今までどおりの私でいゆ」とを許してください！」

その場にひざまずき、頭を垂れる。

「ずつとこんなふつでいるなんて耐えられません。体は大人になつたのかもせんが、私は私です。昨日までと同じアコラです。だから、これからも私は外へ出て、皆と交じりたいのです。兄上、どうか！」

「陛下、私からもお願ひします。アコラを今までどおり扱つてやってください」

カリカ・ラキアもアコラの援護に回る。セイラムは2人を見比べ、フウとため息をついた。

「誰が、それを禁じると言つた？」

「え？」

アコラが顔を上げ、目をしばたぐ。

「いつ、私がお前に後宮でおとなしくしていろなどと命じた？」

「でも……大人の女はそつするものだと、皆が……」

「確かにそつだし、そつしてくれるなら私も心安らかでいられるん

だが、はなからお前にはそのよつなこと期待していない」

諦めるような口調。だが、そこには隠しよつのない愛情が込もつ

ている。

「今までどおり、好きにするがいい。アコラ、お前は王室ではなく、このペルージヤの花なのだ。城の者だけでなく、民からも愛でられて、これからも尚一層美しく咲くがいい」

「ありがとうございます！」

その瞬間のアコラの笑顔

カリームは目を見張った。なんと生き生きとした美しい花なのだろう。輝きが違う。強さが違う。先ほどまでのしおらしい姿よりよほど魅力的だ。

これがこの娘の本当の姿なのだと、カリームは瞬時に察した。

「カリーム！」

「は……はい！？」

ふいに名指しされ、カリームは間抜けた面でアコラを見返した。それがよほどおもしろかったのか、アコラが大きな口を開けて笑う。「もつと賑やかな曲にしろ。さつきのは辛氣臭い」

「え？ でも、あの……」

「ラーシャ、来い！」

カリームがあろあろしている間に、アコラは戸口に向かって声を張り上げている。すぐにパタパタと駆けてくる音がして、ラーシャが飛び込んできた。

「姫さま、やつたー！」

そのままの勢いでアコラに抱きつぐ。アコラはそれを笑つて受け止め、よしよしと頭を撫でた。

「カリーム、何ポカンとしてる？」

「え？ あー……では、港ではやりの小唄など」

「それだとラーシャが歌えない。城下のものにしき」

「姫さま、大丈夫です。適当に呑わせますから」

「さすが、ラーシャだ」

アコラが誓めると、ラーシャは勝ち誇ったようにカリームを見て笑う。カリームの顔が引きつった。

「早く始める。兄上も義姉上も待ちくたびれておられる」

「はい……」

カリームは小さくため息をついて、サズを抱えなおした。

城中でも祝い酒が振る舞われた。

「姫もついに成人なされたか……」

ラディンがボソと告げる。

「えらく落ち込んでるな」

その様子を見て、タリクが笑つた。

「べ、べつに！ めでたい話だし、なにより、これで城出されるともなくなるのだから、私の肩の荷も降りる」

「近衛の務めに専念するか」

「そうだ」

「では、聞こう。もし戦火に巻き込まれたら、誰を守る？」

「お前はどうしていちいち話を広げるんだ？」

「もしもの話だ」

タリクの聲音に真剣なものを感じて、ラディンは返答に詰まつた。タリクが暗示でもかけるように告げる。

「守るのは国王でなくともいい」

「え？」

「アコラでもいいんだ。王家の血を引く者が一人でも生き残れば旗印となる。いざとなれば己の心を優先しろ。より守りたいほうを守れ。忠義や筋道など考えていては板ばさみになるだけで、結局どちらも失うぞ」

「お前……」

「忠告はした。あとは、いつそのときが来てもいいよ」と、ちゃんと心の準備をしておけ。それが、お前のためだ」

タリクの黒い目がまっすぐにラディンを見据える。ラディンもま

た、まばたきを忘れたようにジッと見つめ返す。

そのとき、後宮でジッと歓声が上がった。2人とも弾かれたように我に返る。

「な……なんだ？」

「アコラがまた何かやらかしたかな」

「姫は成人なさったんだぞ！ いつまでもそんな子供みたいな……」

「たつた1日で、人間はそんなに変われないぞ」

「そ、それはそうだが……でも、そういう言い方はないだらう……」

「怒るな。俺はバカにした覚えはない」

「当たり前だ！ そんなことをすればただではすまん！」

「分かつた、分かつた」

タリクが笑いながら酒を注ぎ足す。それを、ラティンは一気に飲み干した。

「そんな飲み方したら、懲醉いするぞ？」

「うるさい！ 飲ませてのはどっちだ！」

言いながら、また杯を差し出す。どうやら、今夜は自棄酒らしい。面倒なことになってきたぞ……と、タリクは心の中でため息をついた。

そんなこんなで、さらに何杯か勢いよくあおった挙句、ラティンはその場にゴロゴロと転がった。

「やつぱり……」

タリクがフウとため息をつく。

「ラティン、おい、起きろ」

「ん……」

肩を揺すつてみる。ラティンがつるをそつてその手を払つ。

「ひめえ……」

「面倒な奴」

タリクは苦笑すると、むずがるラティンを背に負ぶつて自分の部屋へ連れていった。

翌朝、ラティンはタリクの腕の中で目を覚ました。

「あ？」

一瞬己の置かれた状況が分からず、ラティンはしげしげとタリクを見つめる。

むき出しの肩に程よくついた筋肉、そして鎖骨のくぼみ……と顔に視線を移し、つまり裸なのだと認識する。一応、下は穿いているようだが。

そして、己もまた……。

「うわーっ！？」

その瞬間、ラティンは悲鳴を上げて飛び起きた。

「つるさいぞ」

その声でタリクも目を覚ます。

「な、ななんでお前がここに……？　というか、どうしてこんなことになってるんだ！？」

「ああ……」

タリクはポリポリと頭をかくと、ニヤリと笑った。

「昨夜は楽しませてもらつたぞ」

「なつつ」

ラティンが固まつたので、タリクはその体をさつと抱き寄せ、顎を掴む。

「中々可愛い声で泣いてくれた」  
言いながら、顔を近づける。

そのとき

「タリク、ラティン来てないか？」

ふいに扉が開いて、アコラが顔を覗かせた。

「あ……」

双方共に固まる。

次の瞬間、バタンと扉が閉まり、足音が遠ざかっていった。

「違うんです、姫え！」

後宮に続く中庭で、ラティンが涙ながらに訴える。その目線の先に、背中を向けたアコラがいる。

「みごとに引つかかつたな」

ラティンの斜め後ろで、タリクがニヤニヤと笑つてゐる。

「黙れ！ よくもあんな不埒なマネを！」

「飲み潰れるからだ」

「だからって、部屋に連れ込んで服脱がせるか！？ それでよくお前はグース力熟睡できたな！」

「俺は抱き枕がないと眠れないんでな」

「ウソつけ！」

ラティンは顔を真つ赤にして彼になぐりかかつた。

アコラが顔だけ振り向ける。

「べつに、お前たちがどういう関係だろ？ と、私は気にしないが

「だから、誤解なんですってばー！」

「女官たちに良い娛樂を与えてくれてありがとひ」「あつ！…」

木陰で後宮書記官ナリが聞き耳を立ててゐる。ラティンは「しまつた」と青くなつたが、もはや後の祭り。

ナリはニヤリと笑うと、室内に駆け戻つていつた。これで、今晚あたり妖しげな話が後宮に出回ることだらう。

ラティンの意識がフツと遠のく。

「あ、死んだ」

「本当にからかい甲斐のある奴だ」

タリクがクツと笑う。アコラがさすがに疑いの目を向ける。

「で、実際のところどうなんだ？ 何かあつたのか、それともなかつたのか？」

「なかつた」

「そつか」

アユラがホッとため息をつぐ。それからラティンに近づき、その体を揺すつた。

ラティンが我に返る。

「ひ、姫！ 誤解なんです！」

「分かつた、分かつた。その話はもうここから、そろそろ行くぞ」

「は？ どこへ？」

「市に決まつてゐる！」

言つが早いが、身を返す。

「な……姫、成人なさつたのに、何故外へ！？」

「兄上が許してくださつたのだ！ 今までどおり好きにじでよいつて！」

「陛下、なんてことを一つ」

ラティンがあわててその後を追つていつた。

「本当に自由なお姫様だ」

タリクは笑いながら2人を見送つた。それから、いつものようにその場に寝転がる。

そこへ、カリームがやつてきた。

「なんだ？」

じつと己を見つめてくる青年に、タリクが声をかける。

「昨日も俺を見て首をかしげていたな？ 何か気になるか？」

「ええ、見たことのある方だと思ったので」

「ほお？」

タリクは身を起こすと、興味深げにカリームを見つめた。

「でも、本当にその方だとすると、こんなところにいるはずがない。だから、別人だと思うんですが……」

「他人の空似ではすまされないくらい似ている、と？」

「はい」

「では、言つてみる。もしかすると、本当にそつかもしれないぞ」

「からかってるんですか?」「いや

「だつて、もし当人なら、私が分かるはずです。あなたは私のこと知らないんでしょ?」「

だつたら別人ですと、カリームが告げる。タリクはフウとため息をついた。

「俺にはここへ来る前の記憶がない」「は?」

「過去のことは何一つ分からんんだ。仮にお前とどこかで出会っていたんだとしても、今の俺は知らない

「そなんですか?……」

「だから、もし知ってるなら教えてほしい。俺は何者だ?」「どうやらからかっているわけではなさそうだ、とカリームが察する。

「もし、本当に私の知っている方だとするなら、あなたはカリームが口を開きかけたそのとき。

「タリク、大変だ!」

アコラとラティンが血相変えて駆け戻ってきた。

「バスマラの使者だと?」

侍従の報告を聞き、セイラムが眉をひそめた。

「使者の白旗と国旗を掲げております。王からの正式な使いであることは疑いようもなく……」

「では、会わずに帰すわけにはいかんな

謁見の間に通すよう指示し、セイラムは仕度のために元の私室へと下がった。

使者の白旗ともう一つ、国旗をなびかせた一団が王宮の前庭を埋

めている。

国旗に描かれているのは、三頭一身の龍が護る一本の杖。三頭とはシン、ハン、ツイの古族イエヴを指し、杖は権力の象徴だ。すなわち、我こそは古族の後を継ぎ、世界を支配する者であると謳つて居る。前庭をのぞめる回廊に来て、アコラはラティンたちと共にその光景を見つめていた。

「確かにバスラです」

カリームの検分に、アコラは「やつぱり」と唇をかんだ。

「一体、何をしに？」

「白旗を掲げているので、宣戦布告はないですね」

「では、何かの交渉か？」

「まあ、そうこうになるとこなるかと」

「よし」

アコラが身を返したので、ラティンはあわててその腕を捕まえた。

「ダメです！」

「まだ何も言つてないぞ！」

「謁見を覗き見しようと面つらでしよう？」 絶対ダメです

「う……」

図星だったのと、アコラは固まつた。ラティンがフウとため息をつく。

「でも、お気持ちは察しますよ。だから、私が見てまいります

「え？」

「俺も行こう。ラティン、近衛の服を貸してくれ」

「ああ」

「ラティン、タリク」

「姫、ここは我々に任せて、部屋でお待ちになつていてください。必ず、お伝えしますまつますから」

「わかつた」

ラティンの真剣なまなざしを受けて、アコラはうなずいた。すぐ

に身を返し、後宮に戻つて行く。

「私も同席していいですか？」

カリームが尋ねる。ラティンは好きにしが、と返した。

「あなたは客人だ。陛下が自由に出歩く」とお許しなかったのなら、私に止める権利はない」

「じゃあ、先に行つてます」

「ああ。タリク、来い」

ラティンはタリクを促し、まずは兵舎に向かつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2586/>

---

ペルージャの青い華

2011年12月10日19時54分発行